

30W-am01S

市販薬を用いたセルフメディケーションに対する意識調査 ～ITシステムを利用した介入効果の検証～

○古屋 宏章¹, 柴田 佳太¹, 赤川 圭子¹, 藤田 吉明¹, 倉田 知光², 木内 祐二¹, 田中 一正², 山元 俊憲¹(¹昭和大薬, ²昭和大 富士吉田教育部)

【目的】我々は、一般用医薬品選択時に消費者が不要な成分を含む複合剤を選択してしまうことや、禁忌等の確認が不足していることを明らかにしてきた。これらの問題を解決するため、症状や基礎疾患情報を入力することにより、患者に適切な薬を提案する IT システム (以下 IT) の導入を考えた。本研究では IT の体験が与える影響について、調査・解析することを目的とした。

【方法】昭和大学富士吉田教育部倫理委員会の承認を得た後、本学に在籍する 1 年生 612 名中、同意を得られた 582 名 (95%) を対象に 2013 年 9 月 4 日から 17 日にかけて Web 調査を行った。調査は、市販の感冒薬に関する意識調査を実施した後、IT を体験し、IT 使用後意識調査するという順で実施した。調査項目は、『市販のかぜ薬使用時に考慮した事柄』、『解消される不便な点』、『使用意識の向上度』などとし、解析には χ^2 検定または正確二項検定を用いた。

【結果・考察】禁忌・慎重投与を考慮すると答えた人の割合は、IT 使用前は 59 名 (14%) だったが、使用後には 100 名 (23%) となり、有意に増加した ($p < 0.01$)。体験により、感冒薬使用時の禁忌・慎重投与の確認意識が向上したと考えられる。また、医薬品選択の際に薬剤師の意見を考慮するようになる人は、使用前 47 名 (11%) であり、使用後 94 名 (22%) となり、有意に増加した ($p < 0.01$)。これは、IT の使用により、新たな視点を得たことで不明点が増え、専門家の意見をより考慮すべき、と認識したためと考えた。一方、「自分の症状 "のみ" に効く」成分を考慮する者の有意な変化はなかった。以上から、IT は、消費者の感冒薬に対する認識を変化させることがわかった。今後、適正なセルフメディケーションの実施につなげるため、不要な成分を含まない商品選択の視点を増やす等の検討をする。